資料 3－4

久留米市ヤングケアラー支援のための
子どもの生活実態調査（令和５年度）の結果

１　調査の概要

対 象 者：市内の学校に通う小学６年生、中学２年生、高校２年生の全員
実施時期：令和５年 11 月

２　主な調査結果

（１）世話をしている家族がいると回答した割合（全国との比較）

	久留米市	全国
小６（n=841）	7.8%	6.5%
中２（n=524）	6.3%	5.7%
高２（n=333）	4.2%	4.1%

※全国の高校生は全日制のみであるが、久留米市の高校生には、定時制、通信制を含んでいる（以下、同様）。

（２）誰の世話をしているか

	小６（n=66）	中２（n=33）	高２（n=14）
最も多かった回答	きょうだい	母親	母親

（３）どんな世話をしているか

	小６（n=66）	中２（n=33）	高２（n=14）
最も多かった回答	見守り	家事	家事

（４）世話の頻度

	小６（n=66）	中２（n=33）	高２（n=14）
最も多かった回答	ほぼ毎日	ほぼ毎日	ほぼ毎日

（５）世話について相談した経験

	小６（n=66）	中２（n=33）	高２（n=14）
あると回答した割合	13.6%	15.2%	35.7%

（６）家族の世話をしているために、やりたいけれどできないことがあると回答した児童生徒の割合（全国との比較）

	久留米市	全国
小６（n=841）	1.2%	1.8%
中２（n=524）	0.8%	1.8%
高２（n=333）	1.2%	1.3%

（７）学校や大人にしてもらいたいこと

家族の世話をしていると回答した人に、学校や大人にしてもらいたいことについて聞いたところ、小中高生ともに「特にない」が最も多かったものの、それ以外では「自分の今の状況について話を聞いてほしい」や「学校の勉強や受験勉強など学習をサポートしてほしい」の回答が多かった。また、中高生では「進路や就職など将来の相談にのってほしい」の割合が高かった。

３　調査結果からみえる課題

（１）児童生徒の相談のしづらさ

・家族の世話をしているが、誰かに相談した経験がない児童生徒が多くいた。相談していない理由は、相談の必要性や意義を感じていない、相談先が分からないが多かった。相談窓口の周知を図るとともに、相談に対する心理的ハードルを下げるため、相談しやすい体制や仕組みづくりを進める必要がある。

・相談の意義を感じていない児童生徒もいる。そのため、ヤングケアラーへの支援を充実させ、支援を受けるとどういう改善があるのか具体的に「見える化」し、周知していく必要があると考える。またこれは、当事者自らからの相談を増やしていく上で重要である。

・本人がヤングケアラーであることに気付いていないケースやヤングケアラーであることを知られたくないと考えているケースもある。本人から声をあげられるようにヤングケアラーに関する啓発やサポート体制の周知が必要と考えられる。

（２）児童生徒への支援

・家族の世話をしている人が希望する支援としては、「学校の勉強や受験勉強など学習をサポートしてほしい」や「進路や就職など将来の相談にのってほしい」等が挙げられており、勉強や進路等の将来につながるサポートが求められていることが分かる。

・家族の世話により、自分の時間がない、あるいは生活・学習面で影響が出ていると回答している児童生徒がいる。自由時間の創出や生活・学習面での影響をできるだけ小さくするため、例えば家事介護サービスの導入など、児童生徒以外が世話を担う仕組みの検討を進め、支援の充実やサービスの周知をわかりやすい形で進める必要がある。

（３）学校や関係機関への周知啓発

・市内の学校へのアンケートの結果、一部の学校では市の相談窓口が知られておらず、また、関係機関へのヒアリングの中で、ヤングケアラーではないかと思った際に相談できる窓口を知りたいという意見もあった。ヤングケアラーは、周囲の気づきによる早期発見も重要であることから、関係機関向けの研修会の実施や市の相談窓口の認知度向上が必要と考える。

【調査結果 HP】